■喜多尾道冬（ドイツ文学）

Martinů

マルティヌー／歌曲集

オルガ・チェルナー（Ms）イトカ・チェホヴァー（p）
〈録音：2003年1月〉
[Naxos 8.557494]

マルティヌーの音楽が復権してきたのはこの10年くらいのこと。交響曲や管弦楽曲、室内楽曲、ピアノ曲などが聴けるようになったが、歌曲にはほとんどお目にかかれなかった。このCDはじめてのモノ・アルバムと思われるが、出版されていない歌曲の楽譜がまだまだ多数あるという。ここには1930～40年にかけて作曲された作品が集められている。これらを耳にすると、はじめはフランス歌曲の影響を受け、アポリネールや中国の詩への付曲があったり、ジャズ風のリズムをとり入れたりして、国籍不明というかインターナショナルな色合いを示しているのがわかる。その後自国チェコの土の匂いがしだいに浸透してきて、ヤナーチェクやドヴォルザークのイディオムに近づく。それでも彼はこの2人の先駆作曲家とちがい、目はフランスに向き、知的で透明な感覚を失うまいとし、腰を据えて母国に根差すところまでは行っていない。スラヴとラテンのハイブリッドに彼の音楽の特徴があろう。